

2002年7月例会レジュメ

7 - 1 山崎 嘉彦 (機械) 海外業務における技術業務

海外各国での自動車生産技術の調査業務、技術指導業務に従事した印象、経験について話をされた。その中ではドイツの高い技術レベル、日本との技術、設備に対する考え方の違いに強い印象を受けていた。中進国で直面している共通の問題とその対応は、1)学歴優先で大学卒業者が優遇されているが、実力不足で理論が現実の場と結び付いていない。事実に基いて考え、徹底的に現場を観察させること。2)日本で一般化している色々な生産管理手法が過信されている。夫々の手法のもつ意味と導入するために必要な基礎作りの重要さを入念に説明すること。また、技術指導では 事前に相手の状況を調べておき、経営方針は必ず聞き出すこと。現場をよく観察し、良い点を探し出し、必ずほめてから問題点の指摘を行うこと。 を常に心掛けている。全体的には、日本では暗黙である了解事項が通用しない風土。 協調を重視する日本とは異なり、自己主張をしないと認められない文化。と風土、文化の違いを配慮して指導している。

7 - 2 岡安 宏真 (機械) 小形モータの生産技術動向

モータは、いろいろな用途に使用され、種々の製品が開発されており、「現在の社会は、モータなしでは成り立たない」とさえ言われている。その大部分は、小形モータで、大量生産されている低価格の製品である。講演は、小形モータの種類、構造、続いて、その生産技術の動向について解説された。モータは、「小形高性能化」と「原価低減」が要求されており、材料面・設計面・生産技術面の総合的取組みがなされている。最近の生産技術面での進歩の顕著なものに、「分割コア方式による巻線技術の革新」があり、モータの小形・高性能化に貢献している。これは、巻線技術者にとっての、永年の課題であった「より太い線を(高占積率化)、より短く(コイルエンド短縮)」を大幅に進歩させている。各社の種々の方式について紹介された。一方、「原価低減」では、国内での努力が限界に達して、「生産の海外シフト」が進んでおり、「生産技術の空洞化」が、懸念されている。新しい製品を、「創る」ためには、「作る」技術も必要で、「生産技術面も含めた開発拠点を国内に残す必要がある」と力説された。

(宇津山 俊二 記)